

女子大学生における自閉症スペクトラム傾向と愛着との関係

Relations between the autism spectrum tendency and attachment in female university students

佐藤美喜恵

Mikie Sato

埼玉県立大学保健医療福祉学部看護学科

Department of Nursing, School of Health and
Social Services, Saitama Prefectural University

宮岡 佳子

Yoshiko Miyaoka

跡見学園女子大学心理学部臨床心理学科

Department of Clinical Psychology, Faculty of
Psychology, Atomi University

要 約

【目的】自閉症スペクトラム障害 (autism spectrum disorder: ASD) は、対人コミュニケーションの質的障害を中核症状とする発達障害であり近年増加傾向を示している。病因は生物学的環境要因と遺伝的要因であるが、養育環境や母親との愛着との関係 (市川, 2016; 岡田, 2015) など心理社会的要因の関与も指摘されている。そこで、本研究は、青年期女子を対象としたASD傾向と愛着及び養育環境の関連を調査し、女性のASD傾向をもつ者の理解と支援に役立てることを目的とする。

【方法】女子大学生270名を対象に質問紙調査を行なった。質問紙は (1) フェイスシート (年齢、家族構成、対人関係で困っていること)、(2) 自閉症スペクトラム指数 (Autism Spectrum Quotient: AQ)、(3) 内的作業モデル尺度 (Internal Working Model: IWM)、(4) 被養育体験尺度 (Parental Bonding Instrument: PBI) から構成される。

【結果】重回帰分析の結果、IWM下位尺度のうち「SECURE」はASD傾向に対し負の影響を、「AMBIVALENT」は正の影響を与えており、IWMが安定している人はASD傾向が少ないことが示された。PBIではASDへの影響は示されなかった。IWM下位尺度を階層的クラスタ分析で4型 (「安定型」「不安定型」「不安定回避型」「分類不能」) に分け、一要因の分散分析を行った。その結果、「安定型」は他の3型と比較しPBI「CA因子 (care: 親が養護的)」が高く、「OP因子 (over-protection: 親が干渉的)」が低かった。被養育体験に関しては、直接的な影響は示されなかったが、IWMを介してASD傾向に影響を与えている可能性が示唆された。

【考察】ASD傾向を生じる要因として、愛着が関連していることが示された。ASDの発症要因に養育環境が関与していると考えられた。

Key words : 自閉症スペクトラム障害、愛着、内的作業モデル、被養育体験、女子大学生

I 問題と目的

自閉症スペクトラム障害（autism spectrum disorder：ASD）は、対人コミュニケーションの質的障害を中核症状とする発達障害である。ASDの対人コミュニケーションの障害は、青年期以降も社会生活を行う上で様々な支障をきたす。

ASDの病因は、先天的な脳の機能障害が有力とされている（渡辺，2015）が未だ原因は明らかになっていない。神尾（2010）は、生物学的環境要因と遺伝的要因が相互に影響を与え合うことで発症するのではないかとしている。さらに、養育環境や母親との愛着に関係があるとの指摘もある（市川，2016；岡田，2015）。

愛着（Attachment）とは、Bowlby（1977）によると“ある特定の他者に対して強い結びつきを形成する人間の傾向”であるとし、早期の個人の適応性を向上させるために発達してきたものとしている。愛着は、後に対人関係に働く内的作業モデル（Internal Working Models：以下IWMと略す）を形成する対人認知的枠組みとなる。IWMとは、他者と自己の関係に関する心的表象をいい、他者の自分に対する態度を予測し、他者との関係における事象を関連付けて捉え、他者への態度を形成する基盤となると定義されている（Bowlby，1969/1973）。IWMの形成要因については、金子ら（2004）によると、母親の要因・子どもの要因・社会環境要因の3つに大別できるとしている。

近年の大人の発達障害の増加の背景には、愛着の問題が関係しているのではないかと指摘もある。別府（1997/2007）によると、自閉傾向を持つ子どもの愛着の課

題は大きいとし、また、その後の発達においても行動上の問題や精神病理など、臨床上深刻な問題が発生することを示唆している。

以上のことから、本研究では、母親との愛着や養育環境の度合いによりASD傾向の発現が異なるのではないかと想定し、青年期女子を対象としたASD傾向と愛着及び養育環境の関連について、以下の2つの仮説を検討することを目的とする。

- 1) 愛着が安定している、すなわちIWMが安定している者は、ASD傾向が少ない。
- 2) 養護的に養育された者は、ASD傾向が少ない。

II 方法

1. 対象者

関東圏内のA大学に通う学部生女子270名（18歳から28歳、平均年齢：18.6歳、SD：±0.86）を対象とし質問紙調査を行った。大学の講義終了後に調査協力依頼を文書と口頭で説明し、質問紙を配布し、回収した。配布は320名、回収は308名で回収率は92.3%であった。

2. 倫理的配慮

跡見学園女子大学文学部臨床心理学科倫理委員会の承認を得た。

3. 調査内容

質問紙は以下より構成された。

(1) フェイスシート

年齢、家族構成等について尋ねた。

(2) 自閉症スペクトラム指数（Autism Spectrum Quotient：AQ）日本語版（若

林ら, 2004)

自閉症スペクトラム傾向を測定する尺度である。臨床的スクリーニングに使用できるだけではなく、健常者の自閉症傾向の個人差を測定できる。5つの下位尺度は「社会的スキル (Social skill)」「細部への注意 (Local details)」「注意の切り替え (Attention switching)」「コミュニケーション (Communication)」「想像力 (Imagination)」からなる。「社会的スキル (Social skill)」は、社交的な場面が苦手などの社会的スキルの低さ、「細部への注意 (Local details)」は、他人が気づかないような細かい点に気づくなどの異常なこだわり、「注意の切り替え (Attention switching)」は、二つのことを同時にできないなど注意の切り替えの難しさ、「コミュニケーション (Communication)」は、雑談ができないなど他者とのコミュニケーション能力の低さ、「想像力 (Imagination)」は、小説などを読んでも登場人物や背景が想像しにくいなど想像力の乏しさを示す。4件法で回答する。

(3) 内的作業モデル尺度 (詫摩ら, 1988)

成人の内的作業モデルの質を評価するための尺度で、愛着の程度を測定する。Hazanら (1987) の成人用愛着スタイル尺度を参考に、詫摩ら (1988) により作成された。3つの下位尺度があり、「安定 (SECURE) 型」は、他者は応答的で自己は援助される価値のある存在という表象、「不安定 (AMBIVALENT) 型」は、他者に対して信頼と不信のアンビバレントな表象、「回避 (AVOIDANT) 型」は、他者は拒否的で援助は期待できないことから、これ

を補完するために極めて自己充足的な存在という自己に関する表象を示す。6件法で回答する。

(4) 被養育体験尺度 (Parental Bonding Instrument: PBI) (Parker et al., 1979)

16歳までの自己に対する両親から受けた養育態度について評価する尺度である。Parkerら (1979) により開発され、小川 (1991) によって邦訳された。下位尺度は、父親と母親それぞれについての「養護項目 (Care Factor: CA因子)」、「過干渉項目 (Over-protection Factor: OP因子)」からなる。CA因子は得点が高いほど受容的で愛情深く育てられたことを示し、得点が低いほど無関心または拒絶的で愛情が少ないことを意味する。OP因子は得点が高いほど親が自分を幼児扱いし過干渉で支配的な態度で接していたことを示し、得点が低いほど自立性や主体性を尊重されて育てられたことを意味する。4件法で回答する。

本研究では、母親あるいは主な養育者の養護態度について尋ねた。結果、母親が269名、祖母が1名であった。

Ⅲ 結果

1. 対象者の背景

(1) 対象者の特性

対象者308名のうち、回答に不備のなかった270名 (平均年齢 18.6 ± 0.86 歳) を分析対象とした。家族構成は「親と同居」が233名 (86.3%)、「一人暮らし」が33名 (12.2%)、「その他」が4名 (1.5%) であった。

対象者の各尺度の平均値は、IWM下位尺度「SECURE」は20.10 ($SD = 4.79$)、「AMBIVALENT」は22.56 ($SD = 4.88$)、

「AVOIDANT」は19.67 ($SD = 5.05$) であった。

PBI下位尺度「CA因子 (Care factor)」は26.33 ($SD = 6.96$)、「OP因子 (Over-protection factor)」は11.34 ($SD = 6.29$) であった。

「AQ total (AQ得点)」は22.24 ($SD = 5.58$) であった。区分点33点よりも少ない値であった (若林, 2016)。下位尺度の

「AQ (Social skill)」は4.24 ($SD = 2.36$)、「AQ (Local details)」は5.40 ($SD = 1.84$)、「AQ (Attention switching)」は5.60 ($SD = 2.00$)、「AQ (Communication)」は3.90 ($SD = 1.95$)、「AQ (Imagination)」は2.96 ($SD = 1.55$) であった。Table. 1に各尺度の平均値、標準偏差、最小値、最大値の結果を示す。

Table. 1 各尺度の平均値、標準偏差、最小値、最大値

			女性 ($n = 270$)			
			M	SD	最小値	最大値
I W M	SECURE	(6-36)	20.10	4.79	6	33
	AMBIVALENT	(6-36)	22.56	4.88	6	36
	AVOIDANT	(6-36)	19.67	5.05	6	36
P B I	Care factor (CA因子)	(0-36)	26.33	6.96	3	36
	Over-protection factor (OP因子)	(0-39)	11.34	6.29	0	30
A Q	AQ total	(0-50)	22.24	5.58	9	36
	AQ (Social skill)	(0-10)	4.24	2.36	0	10
	AQ (Local details)	(0-10)	5.40	1.84	1	9
	AQ (Attention switching)	(0-10)	5.60	2.00	0	10
	AQ (Communication)	(0-10)	3.90	1.95	0	9
	AQ (Imagination)	(0-10)	2.96	1.55	0	9

IWM: Internal Working Model

PBI: Parental Bonding Instrument

AQ: Autism Spectrum Quotient

2. IWM、PBIがAQに及ぼす影響

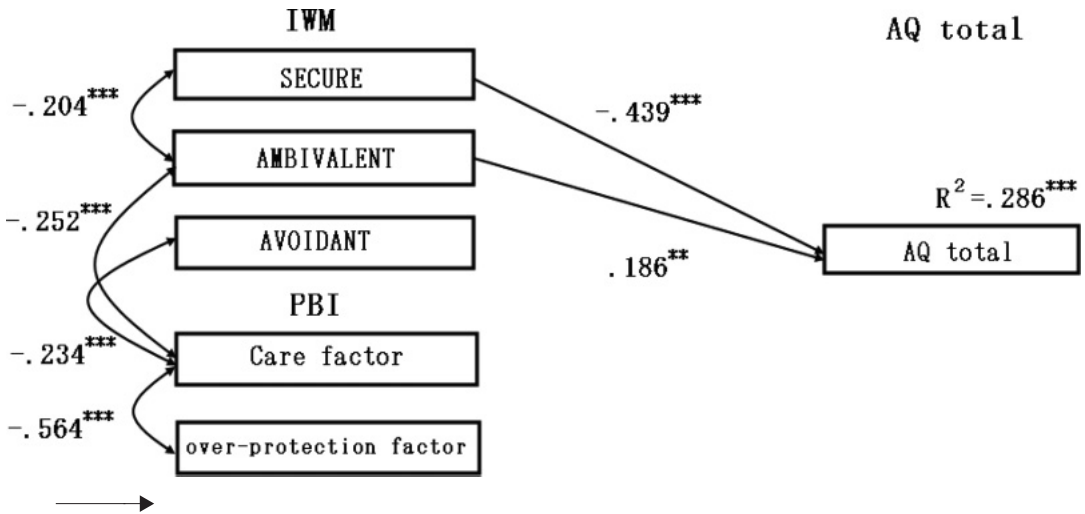
IWMの3つの下位尺度とPBIの2つの下位尺度を説明変数、AQ尺度を従属変数とし、重回帰分析 (強制投入法) を行なった。

(1) IWM、PBIがAQ total (AQ得点) に及ぼす影響

IWMの3つの下位尺度とPBIの2つの下位尺度を説明変数、「AQ total (AQ得点)」を従属変数とし重回帰分析 (強制投入法) を行なった。その結果、回帰式が $R^2 = .286$ ($p < .001$) で有意となった。「AQ total (AQ得点)」に対し、「SECURE」($\beta = -.439$, $p < .001$) は負の影響を、「AM-

BIVALENT」($\beta = .186, p < .01$)は正の影響を与えていた。重回帰分析に基づくパス

図をFig.1に示す。



注：有意なパスのみ描いている
 IWM：Internal Working Model
 PBI：Parental Bonding Instrument
 AQ：Autism Spectrum Quotient
 $***p < .001, **p < .01$

Fig.1 IWM, PBIのAQ totalへの影響のパス図

(2) IWM、PBIがAQ下位尺度に及ぼす影響

IWMの3つの下位尺度とPBIの2つの下位尺度を説明変数、「AQの5つの下位尺度」を従属変数とし、重回帰分析(強制投入法)を行なった。

「AQ (Social skill)」においては $R^2 = .331$ ($p < .001$)で有意となった。「SECURE」($\beta = -.530, p < .001$)が負の影響を与えていた。

「AQ (Local details)」においては $R^2 = .063$ ($p < .01$)で有意となった。「SECURE」($\beta = .128, p < .05$)と「AVOIDANT」($\beta = .209, p < .01$)は正の影響を与えていた。

「AQ (Attention switching)」において

は $R^2 = .089$ ($p < .001$)で有意となった。「SECURE」($\beta = -.182, p < .01$)は負の影響を、「AMBIVALENTE」($\beta = .199, p < .01$)は正の影響を与えていた。

「AQ (Communication)」においては $R^2 = .250$ ($p < .001$)で有意となった。「SECURE」($\beta = -.359, p < .001$)は負の影響を、「AMBIVALENT」($\beta = .265, p < .001$)は正の影響を与えていた。

「AQ (Imagination)」においては $R^2 = .084$ ($p < .001$)で有意となった。「SECURE」($\beta = -.227, p < .001$)は負の影響を与えていた (Table. 2)。

Table.2 IWM, PBIのAQ下位尺度への影響

	AQ (Social skill)	AQ (Local details)	AQ (Attention switching)	AQ (Communication)	AQ (Imagination)
	β				
SECURE	-.530***	.128*	-.182**	-.359***	-.227***
AMBIVALENT	.033	-.064	.199**	.265***	.104
AVOIDANT	.063	.209**	-.061	-.099	-.062
Care factor (CA因子)	-.102	.021	.126	.007	-.052
Over-protection factor (OP因子)	-.010	.064	.101	.101	.046
R^2	.331***	.063**	.089***	.250***	.084***

IWM: Internal Working Model

PBI: Parental Bonding Instrument

AQ: Autism Spectrum Quotient

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$ β : 標準偏回帰係数

3. 内的作業モデルによる愛着スタイルの分類

内的作業モデルの3つの下位尺度を用いて、階層的クラスタ分析 (Ward法) を行

ない、4つの分類を得た。 χ^2 検定を行なった結果、有意な人数比率を確認した ($\chi^2 = 14.98, p < .01$)。

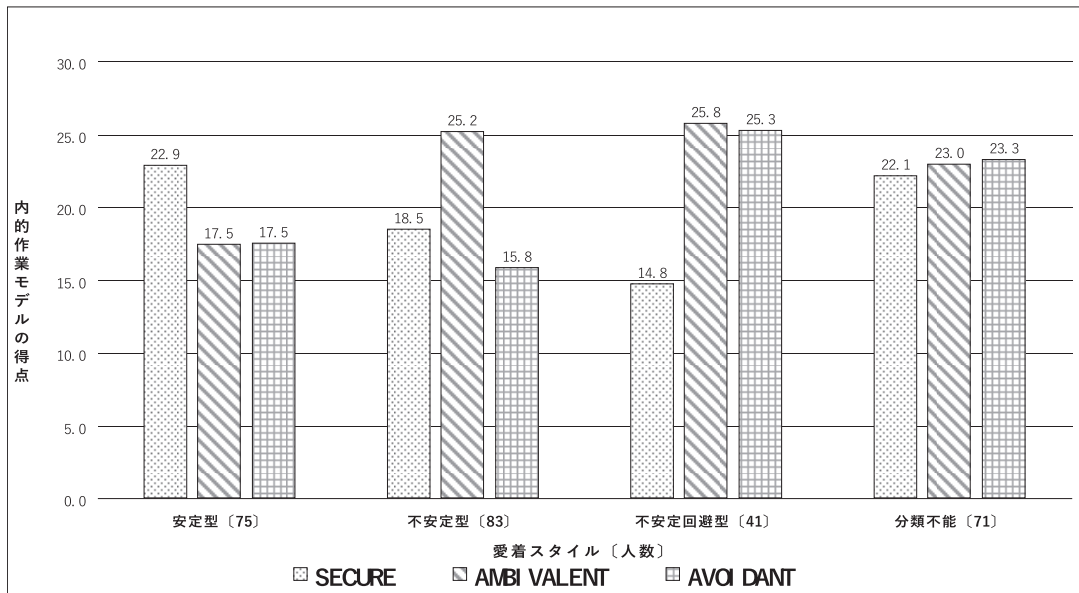


Fig.2 内的作業モデルを用いた階層的クラスタ分析 (Ward法) の結果

分類1は75名 (27.8%)、分類2は83名 (30.7%)、分類3は41名 (15.2%)、分類4は71名 (26.3%) であった。得られた4

つのクラスターを独立変数、IWM「SECURE」、IWM「AMBIVALENT」、IWM「AVOIDANT」を従属変数とした分散分

析を行なった。その結果すべてに有意な群間差がみられた (SECURE: $F(3, 266) = 51.06$ 、AMBIVALENT: $F(3, 266) = 76.55$ 、AVOIDANT: $F(3, 266) = 109.52$ 、すべて $p < .001$)。Fig. 2に4分類の各平均点を示す。

分類1は、IWM「SECURE」だけが大きく他は小さいことから安定した内的作業モデルが最も基盤にあると考え「安定型」とした。分類2は、IWM「SECURE」、IWM「AVOIDANT」が小さく、IWM「AMBIVALENT」が大きいことから「不安定型」とした。分類3は、IWM「AMBIVALENT」、IWM「AVOIDANT」が同程度に大きいことから「不安定回避型」とした。分類4は、IWM「SECURE」、IWM「AMBIVALENT」、IWM「AVOIDANT」が同程度に大きく偏りがみられなかったため「分類不能」とした。

4. 愛着スタイル4型とAQの関係

愛着スタイル4型と「AQ total (AQ得点)」および「AQの5つの下位尺度」との関係性を検討するためにそれぞれに一要因の分散分析を行なった。

(1) 愛着スタイル4型とAQ total (AQ得点) の関係

愛着スタイルによって、「AQ total (AQ得点)」に有意な差がみられた ($F[3, 266] = 21.33$, $p < .001$)。TukeyのHSD法 (5%水準) による多重比較を行なった結果、「安定型」は、「不安定型」 ($p < .001$)、「不安定回避型」 ($p < .001$)、「分類不能」 ($p < .05$) よりも「AQ total (AQ得点)」が小さかった。「不安定型」と「不安定回避型」は、「分類不能」 ($p < .01$) よりも「AQ total (AQ得点)」が大きかった (Table. 3)。

Table. 3 愛着スタイル4型とAQ total (AQ得点) の比較

	a. 安定型	b. 不安定型	c. 不安定回避型	d. 分類不能	全体	F値	多重比較
	平均値(SD)	平均値(SD)	平均値(SD)	平均値(SD)	平均値(SD)		
AQ total	18.96(4.48)	24.43(5.80)	25.24(4.87)	21.41(4.72)	22.24(5.58)	21.33***	a<b,c,d b,c>d

AQ: Autism Spectrum Quotient

*** $p < .001$

(2) 愛着スタイル4型とAQ下位尺度の関係
愛着スタイル4型と「5つのAQ下位尺

度」の関係性を検討するために、それぞれに一要因の分散分析を行ない、その結果をTable. 4に示す。

Table. 4 愛着スタイル4型とAQ下位尺度の比較

	a. 安定型 平均値(SD)	b. 不安定型 平均値(SD)	c. 不安定回避型 平均値(SD)	d. 分類不能 平均値(SD)	全体 平均値(SD)	F値	多重比較
AQ (Social skill)	3.19(2.05)	4.80(2.50)	5.78(1.99)	3.83(2.05)	4.24(2.36)	15.15***	a<b,c b,c>d
AQ (Local details)	5.28(1.91)	5.11(1.86)	5.66(1.76)	5.73(1.74)	5.40(1.84)	1.87	
AQ (Attention switching)	5.04(1.98)	6.12(1.78)	6.15(2.06)	5.28(2.04)	5.60(2.00)	5.74**	a<b,c b>d
AQ (Communication)	2.92(1.63)	4.73(1.83)	4.59(1.90)	3.55(1.95)	3.90(1.96)	15.92***	a<b,c b,c>d
AQ (Imagination)	2.41(1.32)	3.52(1.80)	3.02(1.37)	2.85(1.33)	2.96(1.55)	7.38***	a<b b>d

AQ: Autism Spectrum Quotient

*** $p < .001$, ** $p < .01$

愛着スタイルは、「AQ (Social skill)」($F [3, 266] = 15.15$, $p < .001$)、「AQ (Attention Switching)」($F [3, 266] = 5.74$, $p < .01$)、「AQ (Communication)」($F [3, 266] = 15.92$, $p < .001$)、「AQ (Imagination)」($F [3, 266] = 7.38$, $p < .001$)において有意な差がみられた。

TukeyのHSD法(5%水準)による多重比較を行なった結果、「AQ (Social skill)」については、「安定型」は、「不安定型」($p < .001$)、「不安定回避型」($p < .001$)より得点が小さかった。「不安定型」は、「分類不能」($p < .05$)より得点が大きかった。「不安定回避型」は、「分類不能」($p < .001$)より得点が大きかった。

「AQ (Attention Switching)」については、「安定型」は、「不安定型」($p < .01$)、「不安定回避型」($p < .05$)よりも得点が小さかった。「不安定型」は、「分類不能」($p < .05$)よりも得点が大きかった。

「AQ (Communication)」については、

「安定型」は、「不安定型」($p < .001$)、「不安定回避型」($p < .001$)よりも得点が小さかった。「不安定型」は、「分類不能」($p < .001$)より得点が大きかった。「不安定回避型」は、「分類不能」($p < .05$)より得点が大きかった。

「AQ (Imagination)」については、「安定型」は、「不安定型」($p < .001$)より得点が小さかった。「不安定型」は、「分類不能」($p < .05$)より得点が大きかった。

5. 愛着スタイル4型とPBIの関係

愛着スタイル4型とPBIの2つの下位尺度である「CA因子」および「OP因子」の関係性を検討するために、それぞれに一要因の分散分析を行なった。その結果をTable. 5に示す。

Table.5 愛着スタイル4型とPBI尺度の比較

	a. 安定型	b. 不安定型	c. 不安定回避型	d. 分類不能	全体	F値	多重比較
	平均値(SD)	平均値(SD)	平均値(SD)	平均値(SD)	平均値(SD)		
CA因子	29.47(5.71)	26.25(6.87)	23.39(8.00)	24.82(6.46)	26.33(6.96)	9.46***	a>b,c,d
OP因子	8.68(5.21)	11.24(5.89)	12.49(6.91)	13.59(6.46)	11.34(6.29)	8.66***	a<b,c,d

PBI: Parental Bonding Instrument

*** $P < .001$

愛着スタイルによって、「CA因子」(F [3, 266] = 9.46, $p < .001$) および「OP因子」(F [3, 266] = 8.66, $p < .001$) に有意な差がみられた。

TukeyのHSD法(5%水準)による多重比較を行なった結果、「CA因子」については、「安定型」は、「不安定型」($p < .05$)、「不安定回避型」($p < .001$)、「分類不能」($p < .001$)よりも得点が大きかった。「OP因子」については、「安定型」は、「不安定型」($p < .05$)、「不安定回避型」($p < .01$)、「分類不能」($p < .001$)よりも得点が小さかった。

IV 考察

1. 仮説の検討

本研究では、女性のASD傾向をもつ者の理解と支援に役立てるため、青年期女子を対象としたASD傾向と愛着及び養育環境の関連について調査し、以下の2つの仮説を検討することを目的とした。その結果を受け検討をおこなった。

仮説1) 愛着が安定している、すなわち内的作業モデルが安定している者はASD傾向が少ない。

仮説2) 養護的に養育された者は、ASD傾向が少ない。

(1) 仮説1の検討

仮説1) 「愛着が安定している、すなわ

ち内的作業モデルが安定している者はASD傾向が少ない」に対する結果の概略を示し検討を行う。

その結果、IWMが安定していることを示す「SECURE」が大きいと「AQ total (AQ得点)」が小さくなり、IWMが不安定であることを示す「AMBIVALENT」が大きいと「AQ total (AQ得点)」が大きくなる傾向がみられた。「AQの5つの下位尺度」では、IWM「SECURE」が大きい場合は、「AQ (Social Skill)」、「AQ (Attention switching)」、「AQ (Communication)」、「AQ (Imagination)」が小さくなった。IWM「AMBIVALENT」が大きい場合は、「AQ (Attention switching)」、「AQ (Communication)」が大きくなり、IWM「AVOIDANT」が大きい場合は、「AQ (Local details)」が大きくなった。

さらに、階層的クラスタ分析で、IWMを「安定型」、「不安定型」、「不安定回避型」、「分類不能」の4つの愛着スタイルに分類した。この4型で一要因の分散分析を行なった結果では、「安定型」は「不安定型」に比べ、「AQ total (AQ得点)」、「AQ (Social skill)」、「AQ (Attention switching)」、「AQ (Communication)」、「AQ (Imagination)」が小さかった。

以上、重回帰分析と分散分析の結果から、IWMの安定しているほど、AQ傾向が

低く、不安定なほどAQ傾向が高いことが示され、仮説1)は支持された。

(2) 仮説2の検討

仮説2)「養護的に養育された者は、ASD傾向が少ない」に対する結果の概略を示し検討を行う。

AQを従属変数、PBIの2つの下位尺度を説明変数とした重回帰分析を行なった結果、PBIの下位尺度である「CA因子」と「OP因子」はいずれも、AQに直接的な影響を与えていないことが明らかとなった。したがって、養護的な養育とASD傾向との関係を示す有意な結果は得られず、仮説2)は支持されなかった。

愛着スタイル4型とPBIの2つの下位尺度の一要因の分散分析を行なった結果では、「安定型」は「CA因子」が大きく、「OP因子」が小さかった。逆に、「不安定型」「不安定回避型」「分類不能」は「CA因子」が小さく、「OP因子」が大きかった。以上のことから、養護的な養育が対象者のIWMに影響を与えている可能性が考えられたことから、被養育体験はIWMを介して間接的にASD傾向に影響を与えている可能性が考えられた。

V まとめ

本研究では、女性のASD傾向をもつ者の理解と支援に役立てるため、青年期女子を対象としたASD傾向と愛着及び養育環境の関連について調査した。その結果、特にIWM「SECURE」はAQに対し負の影響を与え、IWM「AMBIVALENT」は正の影響を与えていることがわかり内的作業モデルが安定している者はASD傾向が少ないことが示唆された。また、養育環境について

は、PBIはAQに直接的な影響は示さなかったが、愛着スタイル4型とPBIの一要因の分散分析の結果、「安定型」は他の3型（「不安定型」、「不安定回避型」、「分類不能」）と比較し「CA因子」が大きく、「OP因子」が小さかったことから、IWMを介してASD傾向に影響を与えている可能性が示唆された。

以上の結果から、ASD傾向にはIWMが関連し、さらにはIWMの形成の基盤となる愛着が関連していると考えられた。ASDは脳機能の障害が原因の疾患ではあるが、養育環境も発症に関係していることが示された。

VI 論文の限界

本研究において、内的作業モデル、被養育体験のASD傾向への影響を検討したが、IWM形成時の養育態度やASD傾向の影響、およびIWMの変容可能性などの観点から、縦断的検討が必要であると考えられる。また、本調査は、一般女子大学生を対象としていたため、今後は、成人の発達障害者を対象としたIWMとASD傾向の関係性を検討する必要があると考える。

文献

- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss: Vol.1. Attachment*. New York: Basic Books. (黒田実郎他訳. 母子関係の理論I愛着行動. 岩崎学術出版社. 1976).
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss: Vol.2. Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic Books. (黒田実郎他訳. 母子関係の理論II分離不安. 岩

- 崎学術出版社. 1977).
- Bowlby, J. (1977). The making and breaking of affectional bonds. *British Journal of Psychology*, 130, 201–210.
- 別府哲 (1997). 自閉症児の愛着行動と他者の心の理解 (特集:心の理論) 心理学評論, 40 (1), 145–157.
- 別府哲 (2007). 障害をもつ子どもにおけるアタッチメント. (数井みゆき・遠藤利彦 (編). アタッチメントと臨床領域). ミネルヴァ書房, 59–78.
- Hazan, C., Shaver, P. (1987). Romantic Love Conceptualized as an Attachment Process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52 (3), 511–524.
- 市川宏伸 (2016). 子ども時代に診断されたASD者の成人像—医師の立場から—. 精神医学, 58 (5), 367–373.
- 神尾陽子 (2010). ライフステージに応じた自閉症スペクトラム者に対する支援のための手引き (平成19–21年度 厚生労働科学研究費補助金 (精神保健福祉総合研究事業). 国立精神・神経センター精神保健研究所).
- 金子一史・本城秀次・村瀬聡美 (2004). 母親から子どもへの愛着形成—心理社会的検討—. 小児科臨床, 57: 1273–1279.
- 小川雅美 (1991). PBI (Parental Bonding Instrument) 日本版の信頼性、妥当性に関する研究. 精神科治療学, 6 (10), 1193–1201.
- 岡田尊司 (2015). 愛着障害子ども時代を引きずる人々. 光文社.
- Paker, G., Tupling, H., Brown, L.B (1979). A Parental Bonding Instrument. *Br. J. Med. Psychol*, 52, 1–10.
- 詫摩武俊・戸田弘二 (1988). 愛着理論からみた青年の対人態度: 成人版愛着スタイル尺度作成の試み. 東京都立大学人文学報, 196, 1–16.
- 渡辺雅幸 (2015). 専門医がやさしく語る はじめての精神医学改訂第2版. 中山書店.
- 若林明雄・東條吉邦・Simon Baron-Cohen・Sally Wheelwright (2004). 自閉症スペクトラム指数 (AQ) 日本語版の標準化—高機能臨床群と健常成人による検討—. 心理学研究, 75 (1), 78–84.
- 若林明雄 (2016). 成人用AQ日本語版 (Autism-Spectrum Quotient) 自閉症スペクトラム指数使用手引. 三京房.